

農地で発電、千葉でソーラーシェアリングじわり普及

農地の上に太陽光パネルを設置し、営農しながら発電もする農家が千葉県内でじわりと増えている。パネルの設置は農地の一時転用になるが、農林水産省が昨年3月、許可する方針を出したためだ。売電で経営の安定を目指す農家や再生可能エネルギーの普及に一役買おうとする農家が導入しており、今後も増加が続く見通しだ。

八千代市の兼業農家、今井茂さんは農地に 1476 枚の太陽光パネルの設置を進めている。8月末に完成し、発電を始める計画。出力は 148 キロワット。投資額は 5500 万円で、売電収入で 10 年以内の回収を見込む。

パネル下の農地で生産するのは落花生。作物にあたる太陽光はパネルの遮光で3割程度減るが、日照不足の際にはパネルの角度を変えて補う。「生育に影響はなく、むしろ畑の水分を保つ効果も見込める」と話す。

太陽光発電を取り入れたのは経営を安定させるのが目的だ。天候不順などがあると、農家は所得が落ち込む。「副収入を得ることでリスクを減らしたい」

匝瑳市の専業農家、椿茂雄さんは 501 枚のパネルを設置し、8月中に発電を始める。出力は 35 キロワット。約 900 万円を投資し、9年程度での回収を見込む。パネル下の農地は約 700 平方メートルで、大豆を生産する。

「再生可能エネルギーには以前から関心があり、農業を続けながら導入できる点に着目した」。秋にはパネルを分割して販売し、そのうえで借り受けて運用する市民出資型の発電システムへの移行を目指している。

農地での発電は太陽光を営農と発電で分け合うことからソーラーシェアリングと呼ばれる。地上3メートル程度の高さに一定の間隔を空けてパネルを設置。発電しながらパネルの間から差し込む光で農作物を育てる。パネルの遮光で農作物にあたる光量は減るが、もともとすべての光を光合成に使うわけではないため影響は小さいとされる。

実際、昨年4月に発電を始めた市原市の兼業農家、高沢真さんは「パネル下の畑で落花生やスイカを生産しているが、収穫量は減っていない」と話す。設置費用は 1260 万円かかったが、今年3月までの1年間の発電量は計画を1割以上、上回り、約 170 万円の売電収入があった。

農水省によると、今年3月末までの1年間に出たパネルの設置許可は全国で 97 件。千葉県が4月 15 日時点で集計したところ県内では 14 件あり、他県より先行している。全国有数の農業県であることに加え、一般社団法人ソーラーシェアリング協会(市原市)がいち早く発足し、普及活動に取り組んでいることなども背景にあるようだ。